

## 青年期における親の養育態度と自己評価の関連性

### － 親からの心理的自立を媒介変数として －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
山本 泰子

本研究では、親の養育態度に対する認知が青年期の自己評価に及ぼす直接的影響と、親からの心理的自立を媒介した場合の間接的影響について分析した。

調査は質問紙調査を実施し、大学生の男性 107 名（平均 20.3 歳、 $SD=1.16$ ）、女性 77 名（平均 20.7 歳、 $SD=1.69$ ）の計 184 名の回答を分析の対象とし、各尺度に因子分析（最尤法・Promax 回転）を行い、次に各因子の下位尺度得点を用いてパス解析を行った結果、「母親一娘」「母親一息子」「父親一娘」「父親一息子」関係すべてにおいて、親の養育態度認知から子どもの自己評価への直接的影響が認められた。直接的影響の場合、女性は母親・父親から愛されていると感じるほどに自己評価が上がることを示された。それに対し、男性は母親・父親が過干渉だと思うほどに自己評価が低下するが、その反面、母親からの無関心な養育態度も男性の自己評価を低める要因になることが示された。

一方、「親からの心理的自立」を介した間接的影響は「母親一娘」「父親一息子」関係の同性の親子間にしか認められなかった。女性は母親からの愛情を感じ、自身に関心を向けられ、過干渉だと思うほどに機能面・情緒面における母親からの自立が低下し、自己評価が下がる結果となった。これは、自立の獲得に不可欠な、親密な他者に向けての許容・肯定されるべき「甘え」「依存」の表れであると考えられ、自身の自立状態を振り返った女性は“万能感”が損なわれたために自己評価が低下する傾向が示された。一方、男性は父親から愛されていると思うほど、そして行動を指図されるほどに機能面・情緒面において父親からの自立が低下するが、自己を肯定的に捉える傾向が強いとされる男性は自身の自立状態をありのままに受け入れることで自己評価を高めることが示唆された。また、父親からの愛情を感じるほどに類似の価値観を抱き、その結果自己評価が低下する傾向も示された。これは、男性が父親との間に形成した愛着を土台に、社会的学習モデルとして父親をモデル化し似た価値観をもつが、理想として目指すべき自己と、現実には理想とは異なる父親との価値観の類似を認識し、理想と現実のギャップを感じて自己評価が低下したと考えられる。以上のように、親の養育態度認知による、「心理的自立」を媒介した間接的影響が「母親一娘」「父親一息子」間にのみ認められたことは、同性間に形成されやすい情緒的結びつきのために子にとって異性親よりも同性親の重要性が高まり、同性親からの心理的自立度の認識が子の自己評価に影響を及ぼしたものと考察できる。